

王宝平編

『東アジアの視座からみる漢文学研究』

王宝平主編《东亚视域中的汉文学研究》

中国の学界では、ここ十数年間、「漢文学」という用語はちよつとした流行語になった観がある。書名にこの三文字を銘打った単行本だけを見ても、王暁平著『亞洲漢文学』（二〇〇九年）をはじめ、高文漢・韓梅著『東亜漢文学関係研究』（二〇一〇年）や陳福康著『日本漢文学史』（二〇一一年）、それから金程宇著『東亜漢文学論考』（二〇一三年）など、すでに何種類も出ている。また「中国知網」（CNKI）を検索してみると、関連の学術論文が年間三、四十本ぐらゐのペースで量産されてきたことも分かる。これから書評する王宝平主編『東亜視域中的漢文学研究』（以下『東亜視域』と略す。「視域」とは視野、視角の意）は、言わずもがなこの流行と密接に関係する一冊に他ならない。

ここでいう「漢文学」は、日本の「カンブンガク」と漢字表記

唐
権

上海古籍出版社，2013年

こそ同じだが、両者の外延はずいぶん異なっていることに、まず注意しなければならない。例えば右の諸書は、いずれも中国大陸以外の国々——たとえば日本、韓国、あるいはベトナムなど——に現存する漢文の書籍や作品を研究対象としたものであり、また「亞洲漢文学」や「東亜漢文学」といつても、おおむね中国本土の作品は研究対象から除外されている。類似の用語として、「域外漢籍研究」というものもあるが、「域外」の二文字が端的に示しているように、要するに中国周辺諸国の漢文資料を目玉として扱ったところに、漢文学研究の特色が現れている。

蛇足かもしれないが、日本の「漢文学」はもっぱら中国古来の文学や中国古典文学、という意味で使われている。ややこしいことに、こちらの用法も早くから大陸に輸入され、しかも現代中国

語に根付いたのである。魯迅の『漢文学史綱要』（一九二六年）における「漢文学」の用法はその典型だが、近年では「英漢文学翻訳」や「蒙漢文学交流」のように、中国文学全般を指す用語として使われた例も少なくない。本稿は、こちらの「漢文学」に触れない。

先に挙げた一連の単行本のなかで、評者が最初に読んだのは、王小平著『亜洲漢文学』であつた。日、韓、越諸国の漢詩や漢文小説を縦横無尽に論じるその研究スケールの大きさに、たいへん感動した覚えがある。また、日本現存の中国逸書を数多く見つけ出し、数十種類の書物を一大叢書にして景印出版した金程宇氏の仕事にも、たいへん敬服した（『和刻本古逸書叢刊』二〇一二年）。

最近では、研究蓄積の急速な増大に戸惑つたり、新しい成果の把握がいよいよ困難だと感じたりもしている。

昨年、域外漢籍研究の提唱者として知られる張博偉氏（南京大學）が『東亞漢文学研究的方法与实践』（中華書局、二〇一七年）という書を出した。それによると、「域外漢籍」に関する近年の研究は、「新材料・新問題・新方法」の三段階において旧来の古典学研究と一線を画するという。「新材料」とは文献を収集・整理・紹介することであるが、この段階では諸地域の漢籍を一つのまとまりとして捉えたことで、個別の文献に対する理解を深めていく、ということである。それから二つ目の「新問題」とは、「中国文

学」「日本文学」といった国別の壁を取り壊して、新しい問題提起をすることである。三番目の「新方法」はいささか分かりにくかったが、張氏が提唱する「方法としての漢字文化圏」を考えると、要するに近代以来の欧米中心主義的な偏りを是正して、漢籍研究に適する独自の方法論を構築しよう、ということかと思われる。

張氏がいう「新材料・新問題・新方法」は、近年の域外漢籍研究に対して、中国文学研究者側の意気揚々たる宣言とでも称せよう。実際はどのようなものなのか。この三段階説を念頭に置き、以下、『東亞視域』を組上そじょうに載せてその一端を見てみよう。

『東亞視域』は、二〇一二年十月二十九日から三十日にかけて、浙江工商大学（在杭州）日本語言文化学院と二松学舎大学日本漢文教育研究プログラムとの共同主催による国際シンポジウム「東亞漢文学研究 回顧と展望」に寄せた三十七本の報告の内、計二十九本を集めた論文集である。四八〇頁といふかなり分厚い分量は、同書の内容の充実を物語っている。

編者は、浙江工商大学の王宝平氏である。氏は近代中日文化交流史および書誌学の分野で多くの業績を挙げた研究者であり、ならく中国の日本研究を牽引してきた一人でもある。十数種類にも及ぶ著書の中で、代表作の『清代中日学術交流の研究』（汲古書

院、二〇〇五年）は日本語で書かれたもので、関西大学に提出された博士論文でもある。一昨年、かの浩翰こうかんな『大河内文書』計八種七十八巻七十六冊を、『日本歳晚清中日韓筆談資料 大河内文書』（浙江古籍出版社、二〇一六）という題をつけ、すべてカラーで景印出版したことは、氏が成し遂げた大きな仕事といえよう。日本語言文化学院の長を長年務めた氏は、ここ二十数年間、日本文化や日中文化交流をテーマとする研究集会を数多く主催した。評者は院生の頃からそれらの会議にしばしば足を運び、多くのことを学ばせていただいた。

さて、中国文学研究者たちが巻き起こした漢文学研究のブームを、日本研究者の王氏はどのように見ているのか。このことについて、『東亜視域』の中で明言がされていないが、同書の「あとがき」を読むと、「域外漢文資料の調査と研究」は今や「顕学」になつたという事実を、氏が過分なほど意識していることは明らかである。そして研究集会の開催理由について、「學術の時流に乗り遅れないため、研究最前線にドッキングするため」云々うんぬんとすし言葉が濁して述べられているが、漢文学ブームの中で日本研究者の影が薄いという危機感を、氏が抱いているのではないかと評者は忖度する。

そして論文執筆陣の構成を見ると、いろんな角度から目下の漢文学研究にメスを入れようという編者の意図がよりはつきりと現

れている。執筆者は、中国国内の研究者十八名、日本在住の中国人研究者二名、台湾の研究者三名、日本人学者五名、アメリカの大学に在籍する研究者一名など、まさに多士済々である。各人の専門分野がさまざままで、共通点を強いて言えば、漢籍を研究材料として利用したという点だけだった。こういうふうにとみると、『東亜視域』は東アジア漢文学に対する学際的な研究を目指したものといえる。

同書に収録された二十九本の論文は、編者によって四つに分類されている。それぞれ「東亜漢文学総合研究」（八篇）と「東亜漢文学個案研究」（八篇）、「東亜漢文学交流研究」（七篇）、「東亜漢文学小説研究」（六篇）とある。一読していちばん印象に残つたのは、何よりもテーマの豊富さである。檀君神話の由来を考察したものがある。『日本書記』成立の文献上の特質を論じたものもある。禅文学の受容、禅僧の墨跡を取り上げたものがある。ベトナム漢文小説の出版事情に注目したものもある。中国文人の日本旅行記を取り上げたものがある。明治漢詩人の中国体験を説き明かそうとするものもある。時代でいうと上下二千年、空間でいうと東西五千キロ、つまり東アジアの全時代と全地域をカバーしているのである。二十世紀以前の東アジアに存在していた漢文世界の広がりを知るには、まさに好個の読み物であろう。もつとも、これらの報告を一々取り上げて臧否ぞうひすることは、評者の力では到

底できない。以下、気になった点だけを述べて責めを塞ぎたい。

『東亜視域』の中で評者が最初に注目したのは、漢文学というジャンルの学術史に関連する一連の論考である。上述したように、周辺諸国の漢籍に対する研究が中国の学界で脚光を浴びてからすでに十年以上経ち、そのブームが今もなお続いている。にもかかわらず、それに対する学術的な反省は、これまでまったくなかつたわけではないが、まだ不十分だというのが現状である。この問題に対して、本書はいくつかの角度から有益な反省材料を提供している。

王宝平氏の論文「近百年來中国人編日本漢詩述略」は、陳鴻誥編『日本同人詩選』（一八八三年）が刊行されてからの百三十年の間に、中国人の手によって編纂・出版された日本漢詩集計二十一部を紹介するものである。驚いたことに、これらの詩集を編んだ人物には詩客文人あるいは人文研究者のほか、いくさに明け暮れた軍閥（齊燮元『日本漢詩選録』、一九二五年）や、バリバリの役所高官（王長春『和詩選』、一九四二年）といった意外な顔も含まれる。かつて田舎の青年だった毛沢東が幕末の僧・月性の詩句「男児、志を立て、郷関を出づ」を高吟して故郷を去り、やがて革命運動に身を投じた、という逸話がある。このような事例とあわせて考えると、近代中国社会に及ぼした日本漢詩の影響は実に興味

深いものがある。さらに改革開放後の一九八〇年代に入ると、日本の漢詩に対する中国人の関心がふたたび高まり、ついに『域外詞選』（一九八一年）のような四万冊も売れたヒット作が現れた（三七八頁）。とにかく日本の漢詩に対する中国人の関心はかつて近年始まったものではなく、それに対する鑑賞と研究の歴史は思いのほか早かった。全体像を掴もうとするなら、百年以上のタイムスパンが必要であり、埋もれた先駆者の存在も見逃してはいけない。王論文は、このように日本の漢文学と中国社会との関わり的一端を示したと同時に、通時的な考察の重要性を説いたのである。

一方、三人の台湾人学者は、各人が歩んだ漢文学研究の道程およびそこから得た知見を報告している。陳益源論文は、この半世紀以来の台湾人研究者によるベトナム漢籍の整理と研究のいきさつを回顧しつつ、ベトナム漢籍が如何に重要であるかを力説する。それから王国良論文と王三慶論文は共に漢文小説に光をあてたもので、主として当事者の立場から『越南漢文小説叢刊』（一九八七年）や『日本漢文小説叢刊』（二〇〇〇年）など大部の資料集をどのように編んだかを詳しく紹介する。思うに、台湾の漢文学研究は、中国国内のそれに比べて、発足の時期が十年以上も早いだけでなく、文献の収集や共同研究の組織・実施などの面においても優れたものがあり、むしろ研究成果の蓄積も厚い。台湾で培われ

た経験と成果は、中国国内の研究者に果たしてどのぐらい意識され、吸収されたのであろう。事実、王国良氏は近年中国国内で出版された日本漢文小説の研究書を取り上げ、その研究の浅さを率直に指摘している（四〇三頁）。ちよつと耳の痛い話だが、日本漢文学の研究を志す者にとつては傾聴すべき意見である。

同じく外部からの発言として、日本の視点に拠つた報告もある。その一つ、「漢文学」という概念が中国語圏できちんと整理されていないことを問題視し、明治期の日本人がこの概念をどのように創出したかを考察したのが、杜軼文氏の論文「試論明治時期日人的漢文学意識」である。杜氏は「漢学」「漢文」「漢詩」などの和製漢語の意味変遷を追跡し、そのうえ東京大学における「漢文学科」設立の経緯や、「漢文学」と「支那文学」との関係、日本人が著した中国文学史に見える「漢文学」意識などをも論じている。そこで浮き彫りにされたのは、中国の古典を純粋な外国文学と見るのではなく、日本文学の源流の一つとして位置づけるといふ、明治知識人たちが共有していた漢文学意識である。日本の中国文学史研究が世界に先駆けて発達したことも、実はこのような意識と深く関係している、と杜氏は指摘する。

杜論文のほかに、日本人研究者による数篇の報告も収められている。つまり藤原敦光『三教勘注抄』を対象として、平安時代人の漢文研究法を考証した河野貴美子論文、近代日本漢文学研究の

先駆者の一人である柿村重松の事跡を発掘した町泉寿郎論文、倉石武四郎著『本邦における支那学の発達』の文化史的意味を説いた佐藤進論文、石崎又造『近世日本支那俗語文学史』の特色を分析した川辺雄大論文である。これらの論考はそれぞれ日本漢文学の一面を細かく論じたものであるが、まとめて読んでいくと、日本の漢文学がたどつた道程、なかならず学問の中心から周辺へと追いやられていく凋落たふさの過程が何となく見えたような気がする。その中で日本漢文学が置かれている現状について、川辺氏はさらに次のように指摘する。つまり中国で日本漢文学は域外漢籍と位置づけられ、中国文学の一部と看做されるが、日本では、漢文学はちよつと国文学と中国文学の間に挟まれて、どちらからもあまり重要視されていないという苦しい立場にある（四四二頁）。漢文学に対する認識も位置づけも、それにまつわる社会環境も、国によつて大きく異なることを、ここで思い知らされる。

そういえば、ここ数年日本の漢文や漢詩関連の研究がずいぶん中国に紹介された。にもかかわらず、それに対する日本側の反響は今ひとつ大きくなかったことを、不思議に思ったことがある。今ここで理由を考えると、やはり漢文学に対する認識の差および社会環境の差が大きかったからであろう。ともあれ、中国の漢文学研究が抱えている問題を浮上させたという点において、まず『東亜視域』を評価したい。

もう一つ、評者が同書に注目したのは、目下の漢文学研究で脚光を浴びている研究者たちの報告である。この方面では、王暁平

氏の論文「日本漢文学と文化翻訳」をはじめ、孫虎堂氏の論文「日本漢文小説研究理路芻議」および孫文氏の論文「漢籍比較文献学」芻議」などがあるが、なかでも王暁平論文は力作で、『東亜視域』の巻頭に飾られている。同論文は日本漢文学の「二重性格」、つまり中国文学の外観と日本文学の内実を兼有することに着眼し、「日本文学的性格」の部分を無視して真の作品理解が成立しないと主張する。論文の見所はなんと言っても作者の博学ぶり、例えば『源氏物語』関連の漢文作品として、作者不詳の『賦光源物語詩』や江馬細香の漢詩「詠紫史」三首、さらに菊池三溪の『訳準綺語』など、どちらかというと知られていない資料を引用して評者を驚かせた。しかもこれらの作品から滲み出ているいわゆる「和臭」に対して、王氏はわざわざ響きの良い「外意」という造語に言い換え、漢文学の「新成員」「新气象」としてむしろプラスに捉えている（一七頁）。

王暁平氏はもともと多くの業績を残した中国文学者である。氏の視線は、しかし今や中国文学研究の領域を確実に超えている。中国文学研究の立場に拘泥せず、日本文化に立脚して漢文作品を理解することの大切さを説いた氏の主張は、今後の漢文学研究に果たして新生面を開くことができるだろうか。評者はこの点に関

して楽観的であり、また中国の日本研究も同時に活発化していくことを期待する。

『東亜視域』の中で注目し値する論考はほかにもいくつがある。平安期の日本文人と渤海国使節との唱酬を考察した高兵兵論文と李美子論文、朝鮮と琉球の文学交流を考察した張源哲論文、南宋の禅文学と五山文学との関わりを論じた黄啓江論文は、いずれも実証に立脚した堅実な研究であり、東アジアにおける人的交流と書籍交流の知られざる側面を明らかにしてくれたものである。張博偉氏の三段階説を借りて言うと、これらの論考は漢文学研究に「新材料」をもたらしたものだといえよう。

それから『日本書紀』成立の謎を巡って、森博達説に真正面から反論する井上亘氏の「日本書紀の謎は解けたか」もたいへん力の込められた論考である。中国音韻学の知識を駆使して日本漢籍の分析に挑む井上氏の研究手法は、域外漢籍研究の目線からいうと、「新方法」に属するものであろう。音韻学はもともと中国人学者の御家芸ではないかという不確かな印象を持っていたが、それを自家葉籠中にする日本人研究者がいることに、正直驚いた。この学問の刺激に富む大論争に、音韻学に明るい中国人研究者もぜひ参戦してほしいところである。

全体の印象として、『東亜視域』に収録されている論文は、読みごたえのあるものが四分の三以上を占めている。中国の漢文学研

究および日本文化研究の現状に関心を持つ読者には、一読してほしい一冊である。もつとも、実証性の乏しい報告、文献調査が十分な報告、あるいは中国国内の大学院修士論文程度のもものが、何本か混じり込んでいる。シンポジウムの報告集である以上、仕方がないかもしれないが、本書の傷であると言わざるを得ない。賢明な読者には、それらを読み飛ばすことを薦めたい。

『東亜視域』を読む時、新しいページをめくると、しばしば見慣れぬ人名や書名に出くわした。漢文世界の広さと奥深さをあらためて思い知らされたと同時に、これらの用語がせつかく一冊の書物に収められているのであるから、せめて人名索引と書名索引のようなアイテムをつけてほしかった、とも思った。事実、中国で出版された学術書の中には、索引がついていないものがけっこうある。知識の範囲を読者に簡潔に伝えるため、あるいは読者に効率的に利用してもらうため、やはりあるほうが良からう。
